行 政 視 察 報 告 書

令和８年　11月　６日

長浜市議会議長　中川　リョウ　様

長浜市議会議員　　田中　真浩

私が出席した次の行政視察の結果について報告します。

記

1．視察等名　　令和８年度産業建設常任委員会行政視察研修
2．視察期間　　令和８年10月28日（水）～10月29日（木）
3．視察場所及び視察目的
①広島県尾道市
「観光振興について」
②岡山県井原市
「地域網産物総合交流センター（葡萄浪漫館）について

以上

4．調査内容感想等
・視察の目的
広島県尾道市「観光振興について」
① 歴史・文化資源の活用　②古い町並みの保善と再生　③観光振興戦略
④空家活用　⑤住民参加・民間連携

岡山県井原市「地域網産物総合交流センター（葡萄浪漫館）について
① 農作物（葡萄）の販売拠点から多世代交流拠点へ転換した背景と戦略について
② 神楽・音楽フェスなどイベント開催の運営モデルと成功要因について　③イベントと地域ブランド（葡萄）の関連　④若年層の参加を促す取り組み
・視察内容
広島県尾道市「観光振興について」
尾道市は歴史のある瀬戸内有数の港町である。人口12.8万人長浜と同規模の自治体と言える。歴史遺産、自然環境を有効につかった観光振興を進めているのが印象的である。

1・景観を生かした観光

尾道市は尾道隧道と山に囲まれた箱庭的な地域としまなみ海道がつなぐ島々の地域があり、しまなみ海道から一望できる島々瀬戸内の景色は絶景であり個の観光資源を生かす取り組みがなされており、尾道から愛媛県今治市を結ぶサイクリングロード・サイクルツーリズムをアピールしサイクリングの聖地としてサイクルオアシス（休憩所）の整備しサイクリングイベントなどを積極的に行っています。

2・インバウンド戦略

尾道市の観光客数はしまなみ海道の開通で増加している、また近年広島市目当ての観光客が尾道に流れてくるという傾向がある。データーから増加する観光客は外国人でインバウンド戦略が功を奏しているともいえる。台湾・韓国などの観光ＰＲ、インバウンドセミナー、モニターツアー、多言語対応、外国人サイクリスト勧誘など外国人観光客誘客に積極的に取り組まれている。

3・歴史遺産を生かした観光戦略

尾道市は中世より大陸から日本への玄関としての港町で有り、尾道隧道と山に挟まれた箱庭的な空間に歴史遺産が集中している。因島をはじめとする島々にも村上海賊（水軍）や北前船といった遺産があり、歴史遺産を観光に結び付けるために歴史を《見える化》《ストーリー化》する試みをめざしている。首長は《駅を降りたらこの街が歴史の街であることが認識できるように》進めていく意向である。

4・その他

文化の街として映画の街・文化の街としてのＰＲも熱心で映画ロケ地、文学の小道、等の歴史的景観を活用し《歩きたくなる街》を演出している。また空家を利用しゲストハウスとしての活用や夜間ライトアップなど滞在型観光に力を入れている。滞在型観光客を増やすために、夜のコンテンツ創りを進めている。

・視察の結果を長浜市にどう反映させるか。

人口規模も歴史遺産が豊富なことも両市共通するところがあり滞在型観光客を増加させたいことなど共通するところが多く観光戦略において参考にすべきところが多々ある。歴史遺産を観光に生かすためにはやはり尾道市が進めるように歴史遺産の《見える化》《ストーリー化は》必須であると考えられる。しかしながら《見える化》《ストーリー化》を進める過程で歴史遺産を点から線に、線から面にしていくことが必要で、ここに尾道と長浜の条件の相違点が出てくる。尾道は箱庭に例えられるように尾道隧道と山に囲まれた比較的狭い地域に歴史遺産が集中しており、そのため歩いて回れる範囲で歴史のストーリーが完結できるし、その狭い範囲での景観に配慮すればよく。《見える化》《ストーリー化》が比較的やりやすかったとも考えられる。長浜は比較すれば歴史遺産が点在しているため歩いて回れるものではなく、点を線に、線を面にすること、見える化、ストーリー化することのハードルが高いといえる。距離

とは時間であるし、移動手段のコストでもある。その辺を克服して観光戦略を組み立てていかなければならないと考える。

インバウンドに対してはやはり外国人観光客の集客には尾道市のように諸外国に対して積極的にＰＲをするべきで受動的ではなく能動的に集客に働きかけるべき。また長い目で見るなら多文化共生からは一線を引き日本的文化や日本的生活習慣などを色濃く日本風に保つことこそ外国人観光客を魅了してやまないまちづくりになるとも考えられる。

・視察内容

岡山県井原市「地域網産物総合交流センター（葡萄浪漫館）について

地域農産物交流センター《葡萄浪漫館》は農産物直売所というだけでなく、

観光や地域交流の場としての機能を有しています。井原市の人口は 4 万人弱で規模としては長浜市の 1/3 程度であるが長浜市の周辺地域と似通ったところがあり葡萄浪漫館のある青野地区は合併前は美星町といい名前からもわかるように星空が非常に美しいところで 300 人程度の住人が住んでいる地区である。他地区より 200 メートル高原にあり名産シャインマスカットの他には高級ゴボウなどがある。葡萄浪漫館は地域活性化事業の成功例として知られています。

1・葡萄をテーマにした交流施設

青野地区は西日本有数の葡萄の産地で生産者が育てた葡萄を直売しています。特にシャインマスカットは人気商品でシーズン中は開店前から行列ができ。道中の道路が渋滞し問題になるほどです。

2・直売所は農業振興だけでなく都市部の人との交流

施設の目標は都市部住民との交流を深めながら農村地域の活性化を図ることとされ 1 年を通して様々なイベントがなされています。ウォーキングイベント・サイクリングイベント・音楽イベントなど盛り沢山ですが。イベントを行うきっかけ、動機は実のところ農繁期以外の時期に施設を遊ばせるわけにはいかないという苦肉の策であるという説明がなされた。どのようなイベントをするかは、いろんな住民の活動の様々な芽を摘まない小さな芽もつまない、その中からこれは育つ可能性の高いと思われるものに助成、支援して育てるという方針で進められています。

3・公と民どちらが主体だったか。

出始めはやはり過疎地域であることの危機感が動機となっているようで、過疎著しい青野地区において「地域を守るために」が原動力であったようで。施設管理者の説明では時代もよかったということでした。その当時の首長が剛腕であったこと「とにかくやってみろ」方針としてはその当時日本中ではやりであった第三セクター（半官半民）には絶対しないというものであった。ほとんどな第三セクターがダメになっていく中で先見の明があったように思う。しかし市長も議員も施設運営のためいろんな力添えをしているし時代もコンプライアンスなどがまだまだ緩い時で物事が進めやす

かったとの説明があった。住民が望んだことを行政が主導して公設民営という形で始まり市長の剛腕、議員の人脈なども使い、主に出荷に働きかける葡萄部会が組織される。30 周年を迎えるころには高齢化、過疎化が進み委託管理を経て指定管理となりさらに営業部門は有限会社として現在の経営体制となる。

・視察の結果を長浜市にどう反映させるか。

研修を受けて感心したことは、この葡萄浪漫館に係る人の熱量です。青野地区住民の過疎高齢化による危機感と地区を守りたいという熱意。その気持ちにこたえる首長が剛腕を生かし青野住民の想いを育て、議員も人脈を生かし農政局に働きかけ形にしていく。そして順次住民に権限を委譲していく。この過程を説明を受けて長浜市に反映させる以前に、長浜市の観光政策を反省すべき面もあるように思う。先ず観光に対して国県から補助金が出るからといって笛吹けど踊らないところへの助成は効果のほどをしっかり検証すべきである。長浜市内でも多くの観光施設が第三セクターから始まり指定管理になり赤字運営をしているが民間の熱がないところに助成しても成果物は望めない・どころか赤字を出し負担になる場合が多いと感じる。市としてはいろんな芽を摘むことなくその芽の中から勢いのある、或いは大きく育つ可能性のある芽に水や栄養をやり日をあて育てていくといったプロセスを学ぶべきだと考える。

また、葡萄浪漫館がご盛況である一因にシャインマスカットという目玉商品があることが強みだと思える。種類の多いラーメン屋は早晩つぶれるといわれている。やはり、これっ、という目玉商品を育てるということが必要であると思われる。